

## 文協統合フォーラム = 日系社会の今後を議論 = 全伯から 150 人以上が参加

2024 年 9 月 28 日



集合写真（FIB 提供：佐藤トミオ）

ブラジル日本文化福祉協会（文協、石川レナト会長）は 14～15 日、聖市の同協会ビル貴賓室で「第 16 回文協統合フォーラム（FIB）」を開催した。今年のテーマは「私たちの協会の再発見」。北はマナウス、南は南大河州から参加者があり、総勢 150 人以上で日系社会の今後について議論した。

初日は、在聖日本国総領事館清水亨総領事と石川会長によるパネルディスカッションが行われ、日系社会のミッションや将来について議論した。続いて、ブラジル日本移民史料館の山下リジア運営委員長が史料館の歴史などについて語った。

その後に行われたワークショップでは、参加者が 18 歳～30 歳、31 歳～84 歳のグループに分けられ、質問に対して出す答えが世代差によってどう異なるかを理解しながら議論し、互いの意見を共有した。

続いて、Youtube チャンネル「123Japanese」の活動で知られる日本語教師の山西高史さんが SNS を用いた広報活動についての講演を行った。

初日最後は、日系社会のイベントについてのディスカッションが、北海道県人会平野オストン会長と栗田クラウドジオジャパンハウス運営理事・イビラプエラ日本館運営委員長を中心に行われた。

栗田氏は、パラグアイで 6～8 日に開催された大規模イベント「パンアメリカン日系人大会（COPANI）」が全てボランティアによって運営されたことについて触れ、「ボランティア精神を大切に、参加者が価値ある経験を得られるようなイベントをすることが大事だ」と述べた。

平野会長は「畑仕事は一人でできません。みんなで力を合わせてきました。イベント開催も一緒にするという気持ちが大切だ」と語った。



ディスカッションの様子。(左から) 栗田氏、平野会長

2日目は、ブラジル太鼓協会とサンキュウの演奏、COPANIの報告などが行われた。

両日を振り返って、伊藤光行ドウグラス FIB 実行委員長は「会場が参加者で一杯になったのを見て、ここで生まれる繋がりが最も意味のあるものであると感激しました。FIB は一種の魔法であると思います。参加者の意欲も更に上がり、来年の開催が楽しみです」と語った。

西部アマゾン日伯協会員で同地域のアサヒ自治会で会長を務める高橋ノゲイラみちこさんは「今回初めて参加しましたが、新しい出会いと新しい考えに刺激をもらいました」と語った。

協賛団体の宮坂国人財団の西尾ロベルト義弘理事長は「多くの若者の参加を嬉しく思います。この機会に感謝です」と述べた。